

□ 書評 □

千野直一(編)

千野直一・木村彰男・正門由久・岡島康友(編)

臨床筋電図・電気診断学入門(第3版)

梶 龍兒

(京都大学医学部神経内科)

本書はさきに同じ著者らによって1981年に刊行された第2版の改訂版である。第2版は当時、本邦において臨床応用が始まったばかりの筋電図、電気診断学の入門書として好評を得ただけに、その後の筋電図を取り巻く環境のめざましい進歩に対応した改訂版の登場が長年にわたって待たれていた。この本はその期待に見事に応えている。

本書は大きく基礎編と症例編に分かれるが、主な神経筋疾患における電気診断上の特徴についても簡潔に触れられている。基礎編では、もはや筋電図という範疇でとらえることが難しいくらいに発展した電気診断学を学ぶ上で必要な知識が網羅されており、F波、H波、体性感覚誘発電位などの、その後の新しい知見についても補完されている。電気生理学的診断の方法についても写真や図を多用して分かりやすく記載されていて、初心者が高効率よく電気診断学を学ぶのに適した内容となっている。一方、症例編では、実際に臨床の場で電気生理学的検査を行い診断をつける過程を学べるようになっている。

ここで著者らが強調している点は、針筋電図はいうまでもなく、誘発筋電図においても、患者にとっては

多少なりとも不快な操作や刺激が伴うことを忘れてはいけないということである。実際、そのために患者に対して十分な検査ができないことは我々もよく経験している。それだけに、筋電図検査、神経伝導検査は、必要かつ十分な最少の筋群、神経群に対して行い、患者によい苦痛を与えないとする著者らの姿勢は評価することができる。これは、とすれば繁忙な日常診療において、ルーチンで筋電図や神経伝導検査をオーダーしてしまいがちな我々に対する警句でもある。

電気生理学的検査は、あくまでも日常の神経学的診察の延長であることを忘れてはならない。まず、第一に患者の病歴や背景を十分に踏まえた上で、神経学的所見をとり、鑑別診断を考えた上で必要な検査項目を決定するといけない。そこで初めて電気生理学的検査を行い、その検査結果を分析して、最終的な診断に至るのである。症例編では、著者らの貴重な症例が提示され、それぞれ、診断上のポイントが付記されているので、電気生理学的診断を行う過程を自習するのに最適である。

この本は著者が序文で書いているように、これまで筋電図をはじめとする電気診断学になじみの薄かった臨床医や、これから電気診断学を学ぼうとする医学生や研修医が、短い期間でよく知識を吸収することのできる内容がまとめられているので、是非通読されることをお勧めしたい。

(B5 頁208 図138 写真30 表3 定価(本体5,600円+税)〒400 1997 医学書院・刊)